

近年の若者の対人関係特性の社会心理学的研究¹⁾

川 名 好 裕 (立正大学心理学部)
齊 藤 勇 (立正大学心理学部)
古 屋 健 (立正大学心理学部)
高 橋 尚 也 (立正大学心理学部)
八 木 善 彦 (立正大学心理学部)

Social psychological researches in characteristics of interpersonal relations of recent young people

Yoshihiro KAWANA (*Faculty of Psychology, Rissho University*)
Isamu SAITO (*Faculty of Psychology, Rissho University*)
Takeshi FURUYA (*Faculty of Psychology, Rissho University*)
Naoya TAKAHASHI (*Faculty of Psychology, Rissho University*)
Yoshihiko YAGI (*Faculty of Psychology, Rissho University*)

概 観

「近年の若者の対人関係特性の社会心理学的研究」という全体テーマのもと、それぞれの専門の視点から、若者の対人関係特性について研究を推進してきた。3年間の共同研究の成果を以下の論文で発表する。

- ① 「男女関係の進展による心理的魅力要因の変化」
(川名好裕)
- ② 「日本と韓国の青年の自己評価の比較研究」
(齊藤勇、山田竜平、金成恩)
- ③ 「大学生における親密な人間関係と人格発達」
(古屋健、八木善彦)
- ④ 「SNS 利用における青年の対人関係特性」
(高橋尚也、伊藤綾花)

①の「男女関係の進展による心理的魅力要因の変化」(川名好裕)の研究は、インターネット調査によって20代から40代の男女のサンプルのデータを収集し、青年期から成人期にかけての男女の愛情関係にある男女における心理的魅力の変化側面を研究したものである。男女の関係を友人、片思い、精神的恋人、性的恋人、婚約者、配偶者の6つの交際進展段階に分類し、親密性、情熱性、性欲性、コミットメントという4つの男女を結びつける心理的魅力について分析がなされている。

②の「日本と韓国の青年の自己評価の比較研究」(齊藤勇 他)は、質問紙法を使った自己評価について内心と呈示の二側面からの比較文化的アプローチを行った日本の青年と韓国の青年の対人心理学的実証研究である。日韓の青年の自己意識の側面の共通性と違いなどが明らかにされた。また、自己評価について東アジアの集団主義的価値観の適用の是非について論議されている。

③の「大学生における親密な人間関係と人格発達」(古屋健 他)では、青年期後期における人格発達と友人・恋人関係の特徴との関係について研究がなされた。友人関係の親密性と自我同一性発達との関連、恋人のいる学生といない学生の親密性の発達の比較、自我同一性と同調傾向や不安・懸念との関係が、相関分析および共分散構造分析によって検討されている。

④の「SNS 利用における青年の対人関係特性」(高橋尚也 他)は、SNS (Social Networking System) のうちの、Twitter と LINE を利用する青年期の人々の心理と行動的側面を分析した研究である。こうした SNS を利用する人々のクラスター (群) として、「ヘビーコミット群」、「関係配慮群」、「義理登録群」が区別され、それらの群の人々の Big Five 性格特性、インターネット上の行動 (「一般的積極利用」、「自己アピール」、「敏感即応」、「スルースキル」、「表現法配慮」) の特徴が比較検討されている。

「近年の若者の対人関係特性の社会心理学的研究」というテーマで、各専門領域の著者たちが異なった側面、異なった切り口で研究を行うことによって近年の若者達の対人関係特性について、いろいろな知見が明らかにされるようになってきたと思われる。

①の「男女関係の進展による心理的的魅力要因の変化」では、男女関係の行動と心理的側面を、③の「大学生における親密な人間関係と人格発達」では、友人関係と恋人関係における親密性や自我同一性発達の側面を、④の「SNS 利用における青年の対人関係特性」では、若者の対人的交流に欠かせない SNS の利用の問題を扱い、さらには、②の「日本と韓国の青年の自己評価の

比較研究」では、文化の違いによる自己意識や自己呈示といったさまざまな側面を検討した。若者の対人関係特性という、同じテーマに基づいて、比較的独立的に社会心理学的研究を遂行することによって、統一的な共同研究では得られない様々な知見が得られたと思われる。

注

1) これらの研究は、2011年～2013年度立正大学心理学研究所の共同研究助成のもとで企画されたものである。立正大学心理学研究所の助成に感謝の意を表したい。